

「いやし、包み、祝福し」

「なぜ善良な神様が創られた世界に、悪が存在するのか」という古来議論され続けているテーマがあります。これを専門用語では「神義論」と言いまして、「神様の正義を巡る議論」と捉えて頂ければ良いかと思います。「善なる神様と、悪が消えない世界を両立させるための議論」と言い換えても良いかも知れません。もっとも、信仰の無いところでは、この「神義論」と言うのは、非常に不毛な議論だと言えるでしょう。「この世界を神様が創った」とか「慈しみ深い神様がいる」とか言うから、全然、善くも無く、優しくも無く、愛も無い世界の現実との矛盾が生じているわけで、最初から「神様」の存在を否定しまえば、それで片付いてしまう、そんな性質の議論ですね。ただ、「神様がいない悪と苦しみと不条理に満ちた世界」と言うのも、私から言わせると、それこそ夢も希望も無い不毛な世界ですけどね。放っておけば、どこまで下降していく世界にあって、一部の理想主義者や神様を信じる信仰者たちが「これでは良くない」と踏み止まり、「神様の救いを信じて」前を向き、「神様がいるから」きっと出来るはずだ、と平和と豊かさを諦めずにいるから、この世界は辛うじて均衡を保っているのだと私は思っています。ハッキリ言って、神様を否定するのは簡単です。すでに多くの人たちがそういう世界観の中で生きています。でも、神様を否定して生きる先にある「寄る辺の無さ」は、本当に多くの生きづらさに繋がって行くと個人的には思っています。それは、「神様を信じないと悪いことになる」という責め立てるような話では無くて、単純に「生きる上で道標になったり、励ましになったりするものがあると安心だよね」ということです。

確かに、失敗した時も、後悔する時も、寂しい時も、悲しい時も、世の中には沢山の慰めの方法や場所があります。とある思想家は、「人間理性が発展していく中で、宗教の役割は次第に失われ

ていき、美しい音楽を聴くことや、素晴らしい名画を見ることで、人はかつて神が住んでいたという高尚な世界に思いを馳せ、自らを癒し、励まされることができよう」と言いました。・・・

まあ、確かに、そういう高尚な理性が普及した世界と言うのは一種の理想世界ではあるのかも知れません。人生に行き詰まったと感じて、クラシックコンサートや美術館に足を運び、元気になって、新たに一步踏み出せるような世界になれば、それはフィクションにさえ描かれない立派な世界だと思います。でも現実には、人生に行き詰まりを感じた場合、お酒に溺れたり、人間関係に依存したり、薬物に手を出したり、刹那的な興奮に身を委ねたり、あるいは無敵の人となって「誰でも良かった」と言いつつ、自分よりも確実に弱い人を襲ったり。そういう発散の仕方、逃げ方しか思いつかない場合が多いものです。

「神義論」の話題に戻ります。これは未だ、決定的な回答を得ていない議論ですが、「なぜ善良な神様が創られた世界に、悪が存在するのか」という問いに対して、私が「それってこういうことじゃないかな？」と思う回答例があります。アウグスティヌスという古代の神学者に遡る古い考え方ではありますが、こういう答えです。「神様は、人間をロボットのように制御することもできたが、そうして実現した『完璧に管理された世界』よりも、人間に自由に考え自由に生きるが、豊かな喜怒哀楽を繰り広げる『賑やかな世界』の方を望まれたのではなかろうか」と。神様は、人を管理統率するよりも、人の自由意志を尊重することを優先された、という理屈ですね。神様は人の自由を優先された。だから、世界には人の自由のゆえに、善も悪も実現することになったわけです。そういう考え方もある、ということですね。

ところで、神様の創られた世界で「自由に生きる」ということは、常に私たちは「選択」を迫られるということでもあります。これは、善いこと、悪いこと？ これは、すべきか、すべきじゃないか？ 私たちの人生は、自由であるからこそ、何かにつけて「選択」の連続です。しかし、この

自分で「選択する」、自分で「選ぶ」というのが、とても大事で、それは日常生活においても、また信仰生活において、同じです。

人は、何事も強制されると嫌なものです。自分が納得しているお約束なら良いですが、人から言われる納得もしていない「こうしなさい、ああしなさい」という命令は、心地良くはありません。自分で「選ぶ」とは、人生における心地良さに必要な手順であり、「選択」したからこそ、私たちは心の底から納得して喜んだり、楽しんだりできます。神様への賛美なんか、まさにそうですね。そういう仕来りだからとか、礼拝ってそういうものだから、と言われて、お祈りや賛美を強制されても、嬉しいわけありません。神様が人をそういう風に創ったのだから、それは仕方ない。神様は、御自分への祈りや賛美についてさえ、人の自由に任せたわけですね。

でも、だからこそ、人が自由意志に基づいて、神様に祈ったり、賛美したりしたら、神様は嬉しいわけです。強制された祈り、強制された賛美ではないからこそ、神様は、それを本当に喜んでくださるのだと思います。

ようやく、今日の聖書の話に移ります。今日の聖書箇所のはじめにある「ハレルヤ」「主を賛美せよ」という言葉は、軽々しい言葉ではありません。これは、非常に場数を踏んだ、人生の喜怒哀楽、酸いも甘いも噛み分けた先に辿り着いた、「それでも尚、賛美したい」という自由意志によって語られた「ハレルヤ」であります。その賛美に至る長い道のりを表現しているのが、3節の御言葉です。

「打ち砕かれた心の人々を癒し、その傷を包んでくださる」と。これは、この歌を歌った人の経験談だと思います。つまり、この歌人、詩人は、最初、何か嫌なことがあって「心が打ち砕かれた」という経験をした。善良なる神様によって創造された世界で、にも関わらず、この人は「心が打ち砕かれた」という苦しい経験をした。それは、神様の存在を否定したくなる経験と言っても良いでしょう。

これは、現代社会において、顕著なことかも知れません。「傷ついた」「心壊された」「尊厳を踏みにじられた」しかし、他者も自分もどうしていいか分からず、放っておかれるという。治して欲しい、癒して欲しい。けど、その手立てや頼るところは、よく分からない。そして、手当たり次第に、心地良さそうなものに手を出してみれば、そこには既に、用意周到な金儲けの触手が広がっている。まあ、癒されたいという需要に対して、あの手この手で癒してやろうという供給を行うのはビジネスの基本なので、問題はありません。ただ、遠藤周作が教えているように、「ひどく喉が渴いて何か飲み物はないかと手を伸ばすのだけれど、掴んで飲むのは、コーラやコーヒーばかり。飲めば飲むほど、余計に渴きを覚えて、さらに手を伸ばしてしまう。本当に必要なのはキレイな水なのに、それに気付くことは難しい」という場合もあるかも知れません。

キリスト教が本当に「キレイな水」なのかどうかは、さらに議論のありそうなところですが、でも、イエス様も「命の水」とか「生きた水の流れ」とか仰っているので、多分、少なくとも当たってお腹を下すことは無いと思います。完璧に快樂な人生を求める上では、信仰は意味がないでしょう。水は、美酒美食に比べれば味気なく感じられるものです。でも、神様を信じると、美酒美食では補えない喜びがあることに気付くかも知れません。今日の聖書箇所 4～5 節。夜空に輝く星を見る時も、そこには神様の偉大な御業を感じるようになります。続いて 6 節～7 節。私たちの貧しさが克服される時も、そこには神様の正義と慈しみを感じるようになります。さらに、8 節～9 節。雄大な自然が移ろう時も、それが単なる自然の仕組みや機械的な営みではなく、小さな命に思いを馳せる神様の愛と配慮を感じるようになります。そして、10 節～11 節。この世的な価値観に触れる時も、勇ましさや速さと言った人の好ましい能力よりも、足りないところを神様に委ね、イエス様と共に歩むことの大切さを感じるようになります。

どこまでも行っても、美酒美食は好ましく、水よりもコーラやコーヒーといった嗜好品の方が嬉

しいことは変わらないでしょう。私も、美味しいものを食べたり、飲んだりが好きです。でも、私の命にとって、何が一番大切なのかは、知っているつもりです。世界には、沢山の魅力的なものがある、誘惑がある、楽しく好ましく依存したいものがある。でも、最後まで、私たちの心と身体の健康と幸いを支えてくれるのは、きっと神様なのだと信じていたいと思います。

「打ち砕かれた心の人々を癒し、その傷を包んでくださる」。否応なく不幸なことが起こり、嫌なことが起こり、疲れて、諦めて、もうどうにでもなれ、と思いたくなるような世界で。でも、その心と傷を、癒し、包んでくださる方がいると信じてみる。こんな世知辛い世界にあっても、命を与え、命を守り。日々の幸せを、たとえ、それは微々たる幸せだったとしても、「ちょっと嬉しいな」って思える一瞬を与えてくださる神様がいると信じてみる。そう信じた先で、私たちの人生が、少しでも上向けば、儲けものですよね。何を信じてでも自由な世界です。無粋なことを言えば、現代日本には「信教の自由」が保証されていて、良くも悪くも、何を信じてでも問題にはなりません。では、そのお約束のもと、私たちは、「いやし、包み、祝福し」てくださる神様に心に向けてみるというの、悪いことじゃないでしょう。

この自由な世界で、それでも尚、「ハレルヤ」「主を賛美します」と叫んで得られる、幸せな生き方を、私たちは大事にして。そこに生まれる安心と幸せを拾いながら、今日から始まる 1 週間も、なんか嬉しそうに歩いて参りたいと願うものであります。お祈りを致します。

神様。

今日も、あなたの愛と慈しみの故に、私たちのこの礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。本当に、あなたの導きがなければ、ここに司式者は無く、奏楽者は無く、また、あなたの御言葉を聴くべき会衆一同も無く、ともすれば、御言葉を取り次ぐべき牧師も無かったかも知れません。ここ

に、今日、礼拝のひと時を与えられたことを感謝致します。あなたは、比類なき英知と御業によって、世界を支配される方であると私たちは信じています。しかし、そう信じ続けることの大変さも、あなたはきつとご存じであると思います。あなたの支配される世界で、それでも尚、打ち砕かれた心があり、傷付いた身体を携えていることを、あなたはお忘れではないと信じます。どうか、今を生きる私たちの苦しみや痛みを御心に留めて、愛と慈しみを豊かに注いでください。聖書の時代の人々が受け取った恵みに勝るとも劣らない、平安と幸せを感じつつ、日々の信仰を守り抜くことができますように、お守りください。

このお祈りを、大切なイエス様の御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。

10 月誕生者の祝福祈禱

聖書：詩編 71 編 14～19 節

わたしは常に待ち望み／繰り返し、あなたを賛美します。 わたしの口は恵みの御業を／御救いを絶えることなく語り／なお、決して語り尽くすことはできません。 しかし主よ、わたしの主よ／わたしは力を奮い起こして進みいで／ひたすら恵みの御業を唱えましょう。 神よ、わたしの若いときから／あなた御自身が常に教えてくださるので／今に至るまでわたしは／驚くべき御業を語り伝えて来ました。 わたしが老いて白髪になっても／神よ、どうか捨て去らないでください。御腕の業を、力強い御業を／来るべき世代に語り伝えさせてください。 神よ、恵みの御業は高い天に広がっています。あなたはすぐれた御業を行われました。神よ、誰があなたに並びえましょう。

神様。私たちは、この 10 月に誕生日を迎えられる方々を憶えて祈りを合わせております。あなたによって導かれる人の一生は、決して安楽だけはないことを私たちは知っております。この 10 月に誕生日を迎えられるお一人お一人にも、それぞれに苦難の時があったことと思います。あなたの御業は、滞りなく順風が吹き、また逆風も吹き抜けます。しかし、あなたは、愛する者を決してお見捨てになることのない方であることも、私たちは知っています。順風も逆風も、あなたの愛を曇らせることはありません。10 月誕生者の方々を今日に至るまで支え導いてくださり、そして、こうして私たちと相見える機会を与え、掛け替えのない友人にしてくださった幸いを感謝致します。どうか、この方々の上に、あなたの絶えざる恵みが豊かにありますように。いついかなる時も、あなたの御守りと御支えがありますように。心からお祈り致します。

この祈りを我らの主イエス・キリストの御名を通して、あなたの御前にお捧げ致します。